# メガネのもつ力

今泉吉晴

メガネをかけて遊ぶ遊びは、かなり高度な精神的基盤を前提とする遊びなのではないでしょうか。その面白さには、大きく分けて、二つあるように思えます。まず第一に、メガネを通して見る世界の楽しさをあげることができます。その楽しさは、ふだん見ている世界とのずれの面白さにほかなりません。この場合、メガネを通して見る世界が、ある意味でニセの世界であることを知っていなければ、楽しみも出てこないことでしょう。動物はこれを認識できません。ヒヨコやカメレオンにメガネをかけさせ、食物をついばむ行動がどう変化するか、という実験が行われています。彼らは、メガネをかけて見ている世界が、ふだんの世界とずれていることを認識できず、けんとうちがいの方向をつつき続け、すっかり狼狽してしまいます。メガネを楽しむどころではないのです。

メガネをかける第二の面白さは、見られる面白さ、つまり変装の効果にあります。人間にとって顔は表情の中心ですが、目はさらにその中心です。メガネは目を大きく変化させるのですから、かける操作が簡単なわりに、最高の変身効果を持つ方法といえるでしょう。残念ながら動物はこの楽しみも、知らないようです。だが、遊びとしてではなく、実用としてでなら、動物も相手に与える目の効果を大いに利用しています。ここでは、その意味での目の性質を知る中から、メガネの持つ力について、考えてみることにしましょう。

そもそも動物にとってなぜ目が（見られる目が）重要な意味を持つのか、という問題があります。それはおそらく、彼らのふだんの生活の中で相手にじっと見られるという状況は二つしかなく、そのいずれもが重大な状況だからです。すなわち、敵がじっと自分を見る目、そして、母親がじっと自分を見る目の二つです。もちろんその意味は正反対です。前者は、ねらいを定め攻撃に移ろうという前の凝視ですから、敵意の象徴です。後者は世話をし、保護するための凝視ですから愛情の象徴だといえます。いずれもじっと見るという行為には、相手をよく調べるという第一義的な意味があるわけで

す。調べられる側からは、それは自分に敵意がふりかかるか、あるいは愛情か、のどちらかであるというのが原則です。

しかも愛情の象徴としての凝視が行われる時と場は、きわめて限定されています。それは、母子の間か、ペアーを組む雌雄の間にしかまずありえません。したがって、動物にとって凝視は一般に、敵意の象徴とみる方が、安全かつ適応的なのです。これが、多くの動物がじっと見られると生得的な警戒反応を示す理由だと思われます。ネコは人間にじっと見られると、目をそらし、あらぬ方向を見るか、あるいは怒りはじめます。サルの劣位者は、優位者を見ようとしません。見ると敵意を持つとみなされ、反撃されるからです。

ところで、凝視する二つの目は、大きく見開かれ、動きません。動物は、まるい黒い円が横に二つ並んでいるのを見ると、それに対して、凝視されたのと、同じ反応を示すのです。この反応を利用したのが、例えばガの翅にある目玉模様です。多くのガは左右の後翅に一個ずつ、大きなまるい斑紋を持っています。木の幹にとまっているガは、翅をたたみ、前翅で後翅をかくしています。そして、鳥などがおそってくると、翅をひらき、目玉模様を示すのです。鳥は突然出現した大きな目におどろき、一瞬ちゅうちょします。そしてガを逃がしてしまうこともある、というわけです。

私たち人間も目に対して、同様な反応を示すことがあるようです。満員電車にゆられる人たちは、全員目を窓の外に向けています。それは景色を見るためというより、お互い相手の目をさけていることの結果であるようです。濃いサングラスは威嚇の効果を持ちます。それは下にかくされた目が不気味だということもありますが、基本的にはサングラスそのものが、大きな動かない黒い目として機能しているからです。

子どもが、メガネをかけて遊ぶのを好むのは、一つには、相手に与えるメガネの効果に気をよくするためであると同時に、自分自身がちがってくる楽しみにあるものと思われます。赤ん坊はこの種の変身を理解できません。動物同様、恐怖や恐れなどのなまの反応を示してしまいます。変身を虚構として理解し、その中に遊びの世界をつくり上げる子どもたちの能力は、実に高度なものと言わなければなりません。

（動物学者）